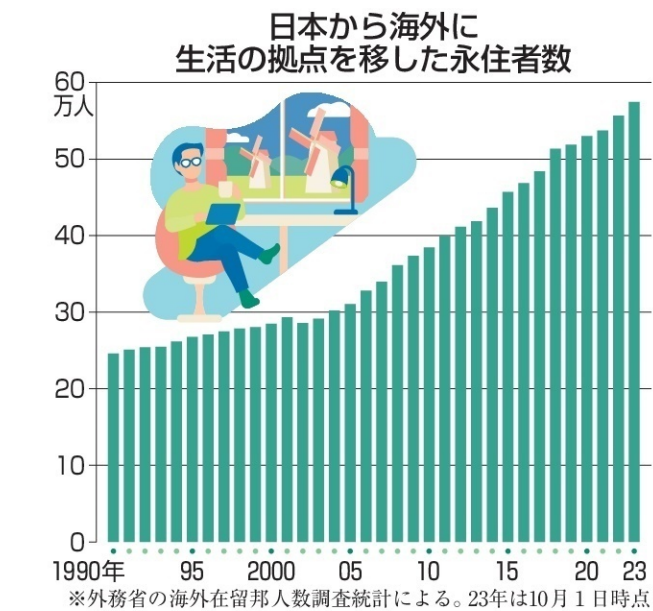


1908年に最初の日本人移民をブラジルへ運んだ笠戸丸(ブラジル日本移民史料館提供・共同)

日本人の海外渡航は明治期に本格的に始まり、国策として集団移住が推し進められた。農村部での困窮を背景にした出稼ぎや、技能向上による自己実現など動機はさまざまだが、150年を超える歴史から浮かび上がるのは、成功を夢見る移民者の強い思いだ。戦争などに翻弄され、苦難も味わったが「新しい文明の形成に参加した(民族学者の故梅棹忠夫さん)功績はさんぜん」と輝いている。

鎖国令を敷いた徳川幕府が倒れ、明治期に最初の集団移住先となったのはハワイなど。サトウキビ農場の人手不足に悩むハワイ当局からの要請に日本政府が応じ、1885年から94年まで約2万9千人の「官約移民」を送った。

その後は民間企業が仲介し、北米やバルーに移住する人も出てき

た。だが、移民者の急増で現地社会との摩擦が各地で起き、排日機運が拡大。コビー産業の労働者を求めているブラジルなどへ移住先が広がった。

国際協力機構(ICA)の海外移住資料館(横浜)によると、1970年代までの移民者の出身地は、広島県が約11万人と最も多く、沖縄県、熊本県、山口県、福岡県と続く。広島などはハワイ当局に農場での勤勉な働きぶりを賞われ、重点的に募集され、後に続く若者も出てきた。

梅棹さんは生前、移民者が暮らした労働、教育を通じて現地社会を支えたと評価。「活力あふれる若者たちのために、世界には新天地がたくさんある」と語っている。

海外移住者 右肩上がり

輝ける場所は世界中に

生まれ育った母国を飛び出し、海外に活躍の場を移す日本人が増えている。生活の拠点を移した永住者は2023年、57万4000人と過去最高を記録した。インターネットで自ら情報を集め、異国で生活を切り開く時代。話を聞いた移住者は、一度きりの人生に全力投球したいという強いエネルギーにあふれていた。

大学卒業後、京都大医学部付属病院に勤めた。病気が進行した多くの患者に言われた言葉に心が動く。健康は絶対にお金じゃ買えない。元気なうちにやりたいことをやりたい。看護師の高田奈里さん(33)はその言葉に背中を押され、海外に出ると決めた。

バックパッカーとして北米や欧州、アジアを放浪。帰国後は地元のと歌山で働いたが、30歳を前に、ワーキングホリデーで訪れたニュージーランドに魅了された。

充実

朝5時に起き、仕事前に勉強する生活を日本で1年以上続け、22年8月、看護師として働くために必要な英語の試験に合格。23年3月に移り住んだ。

ニュージーランドは海外



ニュージーランド・オークランドに移住した看護師の高田奈里さん。ビーチで撮影に就いた。



ニュージーランド・オークランドに移住し、看護師になった菅谷美絵子さん。制服姿で撮影に就いた。

看護師、経験生かし活躍

知り合いから1部屋を間借りして住んでいるが、家賃は約10万円と割高だ。「1人で生きる分には困らないが、生活費は日本より圧倒的にかかる」と苦労を口にする。

菅谷美絵子さん(43)も、日本で看護師として働いたキャリアを生かし、オークランドの公立病院で働く。

ニュージーランドで得た自信

からの看護師受け入れに積極的で、高田さんが勤めるオークランドの病院のスタッフも多国籍チームだ。自らの知識や経験が評価され、医師からも意見を尊重される職場環境で「ずっと生き生きと仕事ができる」と充実した毎日を送る。給料は日本にいた時より多いものの、物価高が進行

成長

海外で暮らしたいという思いに加え、息子には「世界のどこでも生きていける力をつけてほしい」という思いが、移住を決断したのは16年。夫と離婚後、浜松市の実家に戻り、両親の助けを借りて一人息子を育てていた時期だ。

た。どの国でも頑張れるという自信はかけがえのない財産だ。

ボール春香さん(42)は、サモアの夫と結婚し、長男が生まれた直後の07年にニュージーランドに移住した。知的障害や難病を抱える長女は「インクルーシブ(分け隔てのない)教育」を掲げる現地の学校に通



長女も通ったニュージーランド・オークランドの学校で、児童らと写真に納まるボール春香さん(右端)。いずれも共同